

現代短歌 アンソロジー

〈読書〉 二十八首

吉川宏志 「塔」 短歌会選者
Hiroshi Yoshikawa



「読書」と一口で言うが、さまざまな本の読み方がある。娯楽としての読書、修養としての読書、仕事のための読書。青春期の読書は身体を震わせるような感動を生むことがあるし、中年以降の幅広
いじっくりした読書も楽しいものだ。

本を読むことで、精神は別の世界へと旅立つことができる。そして、会ったことのない作者とも、夢のような空間の中で出会うことができ

きる。読書とは、静止して見えるけれども、ダイナミックな〈行動〉でもあるのだ、と思う。読んだあとに、身体の疲れを感じるときがあるのは、まさに〈行動〉だからだろう。

そのような読書体験の不思議さを、さまざまな歌人が歌にしていた。目の前の現実と、本の中の世界が混じり合うような歌が、とてもおもしろかった。

みぞれ降る／石狩の野の汽車に読みし／ツルゲエネフの物語かな

石川啄木「一握の砂」

虚無党の一死刑囚死ぬきはにわれの『別離』を読みぬしときく

若山牧水「路上」

書の上に寸ばかりなる女来てわが読みて行く字の上にある

森 鷗外「沙羅の木」

寒の夜はいまだあさきに洩は Winckelmann のうへにおちたり

斎藤茂吉「寒雲」

● 死刑囚の心に自分の歌が響いたと知る悲しみと喜び。

● 読むうちに生まれる幻影。鷗外に対して親しみが湧く。

● 本は作者と一体。作者に鼻水が落ちたようでユニーク。

『よい本が読みたい』と戦線に長息ける太田伍長もたたかひ死にぬ

半田良平「幸木」

わが癖を真似る幼子夜の床に本をもちこみいつまでも読む

木俣 修「鹵車」

告白と芸術と所詮ちがふこと苦しみてロタンは「面」を発見せり

宮 柀二「小紺珠」

読みゆきて会話が君の声となる本をとぎしつ臥す胸の上

相良 宏「相良宏歌集」

吊るされて玉葱芽ぐむ納屋ふかくツルゲエネフをはじめて読みき

寺山修司「空には本」

軍用機つくる工場の寮寒くただにゲーテを読みをりしのみ

玉城 徹「われら地上に」

「その夜寢臺に二人の男あらむに」と聖書は記せり 黒き紅葉

塚本邦雄「星餐圖」

国会デモをめぐる反目に会議終う帰らん帰りて毛を読むべく

清原日出夫「流水の季」

ホメロスを読まばや春の潮騒のとどろく窓ゆ光あつめて

岡井 隆「鶯卵亭」

癒えたならマルテの手記も読みたしと冷たきベッド撫でつつ思ふ

河野裕子「森のやうに獣のやうに」

体調の崩れをりしに行間にゆとりのありてことば明るむ

篠 弘「凱旋門」

みずからの嘆きを重ね読み継げるチエーホフ全集七巻に入る

小高 賢「怪鳥の尾」

● 読書という小さな願いもかなわず戦死した若者も多い。

● 自分が読書する姿を、子どもという鏡が見せてくれる。

● リルケの「ロタン」か。芸術の苦悩が生々しく伝わる歌。

● 恋する人と登場人物が重なる。誰もが経験する切なさ。

● 啄木の歌の変奏だが、初めて読む喜びに溢れている。

● 戦争の時代を読書することで耐えた痛苦がにじむ歌。

● ルカ伝の一節を引用し、異様な印象を生み出している。

● 「毛」は毛沢東。思想を鍛えようとする一途な青年の姿。

● まるでギリシアの海辺にいるよう。本は別世界への通路。

● 未読の本へのみずみずしい憧憬。下の句に実感がある。

● 組み方により文章の印象は変化する。編集者らしい歌。

● 自分の人生と重ね、修行のように読む本もあるもの。

幾たびを「あ」から「ん」まで読みしならむこれが己の最後の辞典か

大島史洋「センサーの影」

●辞書をひたすら読む仕事もある。まさに忍耐である。

ゆふづつもゆふづつもありとする辞書を離れてまなご西の空見る

今野寿美「かへり水」

●逆に辞書を読む楽しみもある。ささやかな発見に満足。

秋の酒飲みつつ『戦国武将歌』を読みゆく 多く負けた男の歌

佐佐木幸綱「ムーンウォーク」

●一冊の核心を一首でつかむ。短歌とは敗者の文学なのか。

石黒忠憲『懐旧九十年』読みたれど森林太郎の影のうすさよ

小池 光「時のめぐりに」

●人が読まない本を読むのは詩的な行為。鷗外の上官の著。

「好きだった」と聞きし小説を夜半に読むひとつまなざしをわが内に置き 横山未来子「水をひらく手」

●他人の目になって本を読むこともある。繊細な心理詠。

子を真似て私も本を噛んでみる確かに本の味がするなり

俵 万智「プーさんの鼻」

●絵本を舐めることが読書の始まりなのかもしれない。

十三歳で読みし『舞姫』不愉快なり四十歳で読めどかなしからず不愉快 米川千嘉子「一葉の井戸」

●女性の立場から鷗外を批判し、貫き通すこの迫力。

夜の列車になかばねむりつつ読み了へしとんぼが竜になるまでの経緯

真中朋久「重力」

●何を読んでいたのか不思議で、さまざまに想像が広がる。

読まむとし積みたる本のいただきに埃かづきて『荒地の恋』あり

島田修三「蓬歳断想録」

●積読も一つの読書であると誰かが言っていた。

こんな男いじめてみたし旅に読む堀江敏幸はんなりとして

松村由利子「大女伝説」

●このいじめは愛情。読むうちに作者が身近な男になる。

『デミアン』を二度読みし夏日盛りにいつも大きな鳥の影見ゆ

永田 紅「日輪」

●真剣に本を読んだあとには世界が変わって見えるもの。

『ノルウェイの森』読み終えていま家にいるのがわたしだけでよかった

小島なお「乱反射」

●泣いたのだろう。一人だけで抱きしめたい感動もある。